

福澤諭吉と新しい時代

慶應義塾福澤研究センター 教授
西澤直子

1 はじめに

福澤諭吉は1835（天保5）年に生まれ、1901（明治34）年に没した。彼の66年間の生涯は1868年、すなわち明治元年でちょうど真二つに分れる。彼は前半生を近世である江戸時代に生き、後半生を近代である明治時代に生きた。しかし彼のイメージは強く近代と結びつき、西洋文明導入の象徴として捉えられる。それは、彼が新しい時代を作ろうとしたからであろう。

福澤は大阪に生まれた。父百助は豊前中津藩の下級武士であったが、大坂の蔵屋敷（米が貯蔵・販売される各藩の出張所のようなところ）に回米方（年貢米などを換金して藩や大名家の財政に充て、また不足分は豪商から借金する役目）として勤務していた。福澤家の縁戚でもある小田部家の襖の下張文書からは、大坂の豪商加島屋久右衛門に宛てた、父百助の署名がある藩の借金証文も出て来ている。

しかし父は彼が1歳半のときに、病死してしまった。

2 適塾入門と慶應義塾の起源

福澤は父親の死去により、母親、兄、3人の姉とともに中津（現大分県中津市）に帰郷した。そこで下級武士に強いられる、理不尽な慣習を体験することになった。19歳の時、彼は蘭学を学び始めた。ペリー来航をきっかけに外国語能力の需要が高まることを予想した、兄三之助の勧めであった。長崎で1年間学んだあと、1855（安政2）年に大坂にある緒方洪庵の適塾に入門した。1858年になると、塾頭となっていた彼に藩命が下り、江戸にある中津藩中屋敷内の蘭学塾で教えることになった。これが今日に続く慶應義塾の始まりである。しかし江戸に到着して間もなく大坂の友人に宛てた手紙には、3,4年は江戸に滞在する予定であると書かれていて、当初は教師を長く続ける気持ちはなかったことがわかる。

3 海外体験

彼が大きな転機を迎えたのは、1860（安政7→万延元）年の咸臨丸による渡米体験であった。日本では徳川家康の子孫を知らない者はないが、アメリカでは人々にワシントンの子孫を尋ねても誰もわからない。また男性たちが女性に接する姿は、「女尊男卑」と形容できるものであった。彼はこの体験によって、こうした政治制度や風俗の違いを身をもって知ることができた。そして帰国後は、中津藩士と幕臣の二足の草鞋を履くことになり、翻訳を担当するようになった。

さらに大きな転機となったのは、1862（文久2）年に開市開港延期交渉の遣欧使節団の一員として、仏・英・蘭・プロシア・露などを訪問したことであった。随行員には本来の通訳や翻訳業務のほかに、もうひとつ課せられた使命があった。それは政治・軍事・教育制度などの調査で、そのため学校や工場等多くの施設を視察した。その結果日本の急務は「富国強兵」であり、「富国強兵」とは洋学による人材育成であると考えられるようになった。そしてヨーロッパから戻ると、慶應義塾における洋学教育の充実を図り、入門者を把握するための「慶應義塾入社帳」の創設や教科書の購入、カリキュラムの編成などに尽力した。

4 明治維新の変革

福澤にとって明治の変革後は、「恰も一身にして二生を経るが如く」（1875年『文明論之概略』④p.6）、すなわち二つの人生を生きるようなものであった。「チャント物を箱の中に詰めたよう」な社会から、万機（国の政治）も公論によって決し、人心を倦ましめず人びとの意志を尊重する社会（五箇条の誓文）への大きな変化である。

5 一身独立と近代国家の形成

その時に際し、福澤は個々人が主体となる社会の形成を目指すべきであると考え、「一身独立して一家独立し、一家独立して一国独立し、一国独立して天下も独立すべし」（1870年「中津留別之書」⑩p.2）と構想した。彼のいう独立とは、「自分にて自分の身を支配し、他に依りすぎる心なき」ことであり、「一身独立」とは他人の智慧に依らず他人の財に依らないこと、すなわち精神的自立であり経済的自立であった。（『学問のすゝめ』第3編③p.28）

6 『学問のすゝめ』

福澤が1872（明治5）年から1876（明治9）年にかけて全17編を執筆した『学問のすゝめ』は、大ベストセラーとなった。彼の試算によれば160人に1冊（③p.2）の割合で売れ、1872（明治5）年の学制公布に、大きな影響を与えたと言われている。『学問のすゝめ』のなかで彼は、一身独立のための要件（第3編③p.28）として、学問の重要性を説くとともに、他人の自由と独立を妨げないことをあげた。自身の自由や独立のために、他人の自由や独立を奪うのでは意味がない。そして新しい時代のために必要なこととして、男女の平等（「男も人なり女も人なり」第8編③p.88）や身分意識・先入観をなくすべきであること（「人にして人を毛嫌ひする勿れ」第17編③p.196）を主張した。

7 「一身独立」から「一家独立」へ

彼は、身分制度の維持や継承を重視した江戸時代の「家」のあり方を変えなければならぬと考えた。江戸時代の「家」は、能力より家柄を重視する門閥制度を生む。彼は、門閥制度は親の敵であると述べて、固定化しない社会関係を望み、長男による単独相続は、女兒への差別や生まない女性「石女」への差別などを生むと述べた。

8 新しい「一家」へ

彼は夫婦を結びつけるものは、愛と敬と恕であると言い、愛だけならば動物でもある感情で、それに加えて敬とは「夫婦同等の位」（『日本婦人論後編』⑩p. 93）であり、恕とは「己れの心の如くに他人の心を思いやり、己が身に堪え難きことは人も亦堪え難からんと推量して自から慎むことなり」（⑩p. 69）すなわち相手の立場になって考えることができることであると言う。

福澤は家族には争いがなく、約束や駆け引きが不要（『文明論之概略』④p. 201）で「団欒」の場を呈するものであるという。また私徳の涵養の場ともなる。「公德」を堅固ならしめるものは私徳の発育（『日本男子論』⑩pp. 167～168）であり、今後外国人との日常的な交際が広がる中で、日本という国がいかなる扱いを受けるかは、私徳の存在に関わってくる。「徳教は耳より入らずして目より入る」（『女大学評論・新女大学』⑩p. 312）ものであるから、私徳を育てるには、よき手本が示されることが重要で、家族はその場となるのである。また家業が成立することによって、家族は経済的に支え合うこともできる。

1 3 『福翁自伝』1898(明治31)年7月1日～翌年2月16日『時事新報』連載

福澤は最晩年に出版した自伝の中で、これから「出来て見たいこと」として、1) 全国男女の気品を高め、真実文明の名にはずかしくないようにする、2) 宗教で民心を和らげる、3) 資金を投じて有形無形、高尚なる学理の研究を支援する（⑫pp. 405～406）を挙げた。そして1900年2月に前文および29条から成る慶應義塾のモラルコード、修身要領を発表し、その普及に努めた。「修身要領」普及運動のためには、慶應義塾の売却まで考えている。

1 4 おわりに

日本にとっての「富国強兵」を考えた時に、福澤は人材の養育であると考え、近代的教育機関の重要性を考えた。近代社会を形成するのは「一身独立」した人びとであり、そこには、近世とは異なる学問が必要である。「修身要領」は第2条で「心身の独立を全うし、自らその身を尊重して、人たるの品位を辱めざるもの之を独立自尊の人」と述べる。福澤がめざした社会はどのような姿であったのか、また結局日本は、いかなる近代社会を形成したのかを振り返るとき、社会を構成する個々人の「一身独立」「独立自尊」の重要性に気づかざるを得ない。

*福澤の言葉は、『福澤論吉著作集』（全12巻 慶應義塾大学出版会 2002～2003年）より引用した。○数字は巻数を示す。